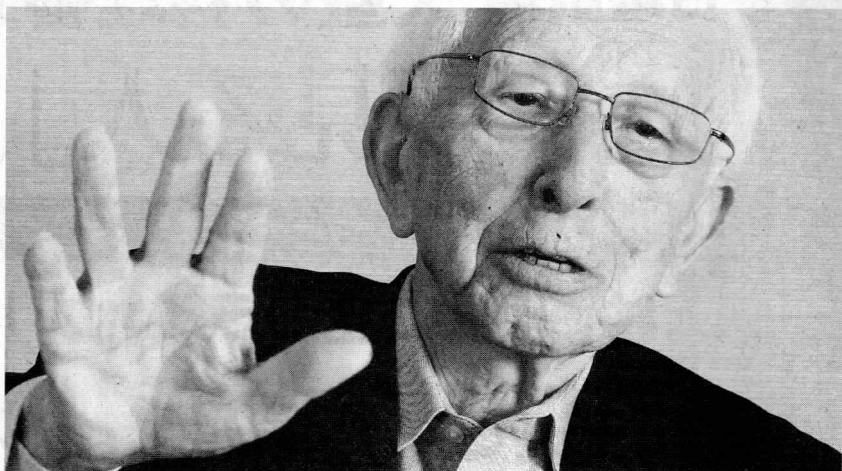


# 論点スペシャル



## 費用膨大破綻は明らか

建築家

### 槇文彦氏

今からデザインをやり直すべきである。このままいくと建設費、維持管理費は膨大となり、財政は間違いなく破綻する。「負の遺産」となること

まき・ふみひこ 1952年東大卒、54年ハーバード大学院修了。東京体育館、幕張メッセなどを設計。93年にプリツカー賞を受賞した。86歳。

とは明らかであり、それを国民に押し付けることは絶対に避けなくてはならない。

このような事態を招いた原因は2012年11月の国際

コンクール(コンペ)で巨大なキールアーチ構造のデザインが選ばれたことにある。審査に加わった人たちも誰一人、(イラク出身の女性建築家の)ザハ・ハデイド氏のデザインがこれほど複雑で、大変なものとはわからなかった。

日本スポーツ振興センター(JSC)は総工費2520

億円で進めると決めたが、一時はゼネコンが3000億円超の見積もりを出し、今でも3000億円近くかかるという情報もある。

我々のグループは、巨大アーチ構造が高コストや工期の長期化を招いているとして、アーチ構造を取りやめ、開閉式屋根も不要とする提言を行った。実行すれば1000億円程度、総工費が抑えられる。

だが、JSCなどによる構造解析も完全に終了したわけではなく、こうしたコスト的、

技術的な検証も終わることなく、建設を先に進めると決めた。極めて危険なことである。

また、国際コンペで採用された事実を尊重しなければならぬとも主張している。ただ、ザハ氏は、デザイン監修者に過ぎず、施主が契約を終了させても国際法上は問題があるとは思えない。このような前例はいくらでも存在する。

維持・管理の面でも問題が大きい。巨額の建設費が必要とされながら、この競技場は、スポーツ競技用の健全な芝生の育成のため、年間12日間しかコンサートなどのイベント使用が許されない。

そこから得られる収入は10億円程度に過ぎないが、この

ために開閉式屋根などを設置するこの施設には莫大な維持、管理費が必要であり、すでに財政的に破綻しているといえる。五輪後の運営の民間委託を検討しているということ自体が財政に対する不安を象徴している。

この施設は、年間50日程度しか使用されない巨大な沈黙の土木構造物であり、今のままで都民から歓迎されるのだろうか。ポスト・オリンピックにおいて、身の丈にあった屋根なしスポーツ専用施設を建設することが重要なのであり、見直しのための時間がないうというなら、19年のラグビー・ワールドカップは近隣の別会場で行うべきである。

(社会部 崎田雅広)